

平成二十七年 度 入 学 試 験 問 題

国 語 (理系)

一〇〇点満点

△配点は、学生募集要項に記載のとおり。▽

(注意)

- 一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
- 二、問題冊子は表紙のほかに10ページ、解答冊子は表紙のほかに16ページある(うち10ページは下書き用)。
- 三、問題は全部で3題ある(1ページから10ページ)。
- 四、試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
- 五、解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
- 六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
- 七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
- 八、問題冊子は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

次の文を読んで、後の問に答えよ。(四〇点)

英語には「To cut a long story short」(かいつまんで話すと)とか、「Please make your story short」(手短かに言つて下さい)とかいう言い回しがあるらしい。日本語の感覚からすると身も蓋もないような言い方であるが、それだけ明快でもある。

しかし、⁽¹⁾ただ長い物語を短くしたものが短編ではない。サローヤン式に言うならば、鯨をいくら細かく切り刻んでも、鱈⁽²⁾にはならない、それは鯨の切り身である。短いというのは、話の長短よりもむしろ文章の性質から来る。書き出しの一行が、あるいは一節がその作品のスタイルを決定するとよく言われるが、十枚で完結すべき物語はすでにその分量に相応した文章の調子を持つている。調子というところを呼吸、リズム、間合い、密度等々、いろいろ好きなように言い換えてもいい。「汝のストーリーを短くせよ」と言われなくても、それ以上長くも短くもなりようがないのが作品の正しい寸法である。

短編では、「この物語を始める前に」だの、「先刻もちよつと触れておいたが」だの、「これは余談であるが」だのと悠長なことはやってられない。長編の読者は途中で少しくらい注意力が眠り込んでも、作者がそのつど揺り起こしてくれるから安心であるが、短編はそれができない。説明や注釈にも頼れない。となると、残るはイメージしかない。具体的な物の形や印象を、手早く読者の脳裏に焼きつけてはならない。

*⁽²⁾チエーホフが、彼に恋した作家志望の人妻アヴィーロワに語つたという「生きた形象から思想が生まれるので、思想から形象が生まれるのではない」という言葉は有名である。長編と短編を器用⁽²⁾に書き分けている現代イタリアの作家モラヴィアが、短編を抒情詩に近いとし、長編を評論や哲学論文になぞらえているのもその辺を衝いたものである。

もつとも、私のこういう言い方は実は本末転倒で、短編の作者はもともとイメージで語るのが得意なのだ、その反対は苦手なのだ、と言うほうが本当かもしれない。彼の書くものが短いのは、イメージというものはそうそう引き伸ばせないからである。ルナールなどは、「十語を超える描写はもうはつきり目に見えない」と極端なことを言っている。

イメージという言葉を使い替えようとすると、どうもびったり行かなくて不便である。影像、映像、形象、物の姿、心象な

どと並べてみるが落ち着かない。とにかく網膜にうつるものも、心に浮かぶものも、ともにイメージであろう。絵や写真やテレビの画面もイメージであり、フランス語で「イメージの狩人」といえば報道カメラマンや映画監督のことでもある。

一八九〇年代、青年国木田独歩が行く先々で自然の美にひたっていたちようどその頃、フランスではルナールが故郷の田園を再発見しつつあった。彼の文章の極致を示す『博物誌』のプロローグが「イメージの狩人」と題されている。「彼」は朝早く起きて、一日野づらや川辺や林の中を歩き回り、いたるところでイメージを採集する。そして、日が落ちると家に帰って、明かりを消し、眠る前に長いことかかかってそれらを反芻する。

「イメージは、思い出すままに、素直によみがえる。一つが別の一つを呼び覚まし、そうして燐光を発するイメージの群がりが、新しくどんどん増え広がって行く。ちようど、一日じゅう追い散らされていた鷓鴣のむれが、危険も去って夕べの歌をうたい、畑のくほみでお互いに呼び交わしているようなものだ。」

田園風景にことよせた一つの喩えであるが、自分の文章はこんなふうにして生まれるのだと言っているのであろう。作家の目はレンズであると同時に対象を捕らえる網である。文章でも写生ということがよく言われるが、その喩えはむしろ誤解を生みやすい。書くためには記憶というフィルターと、回想できるようになるまでの十分な時間が必要である。

ルナールで最も知られている『にんじん』は、それ自体がごく短い短編である章を五十近く並べたもので、筋といつてはあまりない。初め小学生程度だったにんじんが、最後には高校生ぐらいになっているのが見届けられる。子供は放つて置いても大きくなるのだから、これくらい変哲もない話はない。ルナールは二十四歳で十七歳のパリジエンヌと結婚し、奥さんは翌年彼の郷里で長男を生む。その際、実家の母親が愛妻につらく当たるのを見ているうちに、自分の子供時代のことを少しずつ思い出して行ったらしい。早くも次の年には、いずれ『にんじん』に収まる話をいくつか雑誌に発表している。

その第一話『めんどり』は、この本を一度でも読んだ人、読みかけた人なら、あの風変わりなヴァロットンの版画の挿絵ともみすぐに思い出されるであろう。にんじんが母親に鶏小屋の戸を閉めにやらされ、寒いのと怖いので震えながら闇を突つ

切つて行き、無事任務を果たして凱旋の気分に戻るが、誰にも褒めてもらえない。どころか、母親に「これから毎晩、お前が閉めに行くんだよ」と言われる。

この章は長編小説ならば満を持して書き起こすところであろう。だが、『にんじん』という作品は今も言ったように、あちこちに書いた小品の寄せ集めである。『めんどり』以前に書いたものすら入っていて、全然執筆順ではない。作者が巻頭には次の『しゃこ』でも、その次の『犬のやつ』でもなく、是非ともこの『めんどり』を配したいと考えたのは、⁽⁴⁾彼一流の計算があつてに⁽⁴⁾がいない。

ルナール自身は『にんじん』を「不完全で、構成のまずい本」と言っているが、それでも『にんじん』一巻が『めんどり』で始まるのはいかにも適切で、作者のアレンジの妙であり、かつまた読者への親切である。それは一編の挿話でありながら、要領のいい人物紹介を兼ねている。そればかりか、各人物のこの物語における位置や役割や相互の関係といったものを一挙に示す、わかり易い見取り図にもなっている。しかも、抜け目のない作者は只の一語も紹介や説明の労をとるわけではない。人物一人一人に、いわば順番に自己紹介をさせるだけである。何によつてかといえは、会話によつてである。いきなりもう戯曲のような書き方である。

小説の描写というと、われわれはとかく風景描写とか心理描写とかを考えて、会話も描写であることを忘れがちである。しかも、会話ぐらい直接的、具体的、即効的にその人物を表現してのけるものはない。初対面で予備知識がなくても、口のきき方ひとつで相手のことがわかるようなものである。ルナールがこういう書き方を選んだのは、会話こそ自分の最強の武器であることをよく心得ていたからであろう。

(阿部 昭『短編小説礼讃』より)

注(*)

サロイヤン 二十世紀アメリカの小説家、劇作家。

チエーホフ 十九世紀ロシアの小説家、劇作家。短編の名手として知られる。

鷓鴣 目キジ科の鳥のうち、ウズラとキジの中間の体形をもつ一群の総称。

『にんじん』 ールナルの代表作。「にんじん」とは赤毛の主人公につけられたあだ名である。

ヴァロットン スイス生まれの画家。十九世紀末から二十世紀初めにかけてパリで活躍した。

問一 傍線部(1)について、筆者はなぜこのように述べているのか、説明せよ。

問二 傍線部(2)は短編と長編のどのような相違を述べたものか、説明せよ。

問三 傍線部(3)について、筆者はなぜこのように考えるのか、説明せよ。

問四 傍線部(4)について、筆者はなぜこのように考えるのか、後の二つの段落を踏まえて説明せよ。

報道は人間の生理的な必要である。しかもこの必要は近代になってから日をおつてその強度を増している。それには色々な理由が考えられる。第一に経済的にも政治的にも文化的にも世界の諸国が緊密に結び合され、そのために世界の片隅に起こつた事件がやがて各個人の生活に影響を及ぼすようになって来たからであろう。吾々から遠く離れたところで勃発した戦争が、いつ吾々自身を戦場に立たせるか判らない。外国の穀物の産額が吾々の生活に深刻な変化を惹き起こすことも決して稀ではない。第二に社会の事情が甚だしく複雑性を加え来つていることが考えられる。或る国の状態が他の国の民衆の生活に影響を与えると云つても、それはいつも直接的なものばかりではない。両者の間には他の幾つかの国の状態と利害とが立つていて、そこを通過する影響に常に新しい方向を与えようとしている。穀物の産額の増大が必ず價格の低落を結果すると言ふことは出来ない。一国内部にして見ても、そこには神の如き眼を以てしなければ到底その全貌を捕えることが出来ないような複雑な関係が横たわつている。第三に社会の変化と運動とがその激しさを加えて来たことを指摘しよう。昔の学者は動く社会と動かぬ社会とを区別した。前者はヨーロッパの社会のことであり、後者はアジアの社会のことである。これはヨーロッパが夙に資本主義を確立していた時に、アジアが未だ封建主義に立っていたからである。資本主義社会は本質的に動く社会であり不断の変化を伴う社会である。アジアも今は動く社会になつてゐる。もしも環境が動き変ずるものでないとしたら、吾々は報道を生理的必要と見ることは出来ない。父祖の代から行われている習慣に頼つて生きて行くことが出来るはずだからである。動く社会は報道を必要とする社会である。第四に近代社会においては各個人が自分で生きて行かねばならぬということが注意されねばならぬ。昔は誰かが多くの人々に代つて環境を知り適応の道を学び、他の人々はその後について歩んで行けばよかつた。しかし今は個人主義がいかに非難されようとも、各人が自己の運命の主人にならねばならぬ。自分の幸福は自分で喜び、自分の不幸は自分で嘆かねばならぬ。自ら生きようとするものは、自ら環境に適応せねばならず、自ら環境について知らねばならぬ。現代の人間が報道を欲するのは、その当然の権利に基づいてゐることである。

現在の報道、交通、通信の機関は高度に発達した技術を基礎として立っている。外界の出来事を知り且つ知らせるためには、眼や耳が吾々の身体に具つている。單純な社会生活にあつてはこの眼や耳で十分に事が足りたのである。人間の生活を動かすものは主として眼や耳の届く場所から生じていたからである。封建社会においても日常の会話で問題となる人物は、通常これを語る人々が既にその容貌を知り、その言葉と動作とに接したことがある人間であつた。ところが現代においては人間の生活に作用を及ぼすものが、およそ眼や耳の届かぬ遠隔の地に住んでいる。現在では眼や耳、総じて人間の感覚器官は自然のままの形態では最早環境への適応に役立つことが出来ない。感覚器官は補足されねばならぬ。延長されねばならぬ。発達した技術的装置はあたかも新しい眼であり耳である。技術の進歩は何人も知るように極めて迅速である。だがこの迅速に進歩してやまぬ技術がまず第一に撰取され応用されるのは、軍事的領域を除いたら、恐らくこの報道や通信の領域であろう。電信、電話、ラジオ、新聞、そういうものは吾々の感覚器官の延長であり補足である。というよりも既に今日では吾々の感覚器官そのものになつていと言へるかも知れない。健全な眼や耳を持つてゐるものは、自分が眼や耳を持つてゐるという特別の意識を欠くのが普通である。それ等のものがはつきりと意識に上つて来るのは、かえつて何か故障の生じた場合である。それと同様に、新聞が毎朝配達され、ラジオが朝から晩まで喋つてゐるという状態は、今日の吾々にとつて特にはつきりと意識する必要のない当り前の生活である。吾々はそれで安心して生きて行くことが出来るのである。

ところで吾々の感覚器官の延長であるようなものが突然その機能を停止するか、またはその機能を甚だ不十分にしか發揮せぬか、或は——畢竟同じことであろうが——十分に機能を發揮していても吾々がそれから遮断されるといふような場合を考へて見よう。吾々が急にこういう状態の中に移されたとすると、その時吾々の心は何事でも自由に書き記すことの出来る白紙になつてしまふ。しかし白紙という表現は余り適切なものでないであらう。蓋しこの白紙は暗い底知れぬ不安によつて一色に塗られているからである。それは眼や耳が急にその機能を果さなくなつたのと同じであらう。そうではない。それよりもつと不安なものである。眼や耳に故障が起こつた時、その原因は一般に自分の身体の中にある。医者へ駆けつけければ癒るである

う。ところが感覚器官の補足乃至は延長がその機能を営まなくなった時、その原因は勿論自分の身体の内部などにあるのではない。自分の外に、しかも今となつては容易に知ることの出来ないところにあるのである。自分でどうすることも出来ないような強力なものが、その原因となつていたのであろう。吾々が眼隠しをして往來を歩かせられた場合、「水溜りがある」と言われると、もう一ヶ月も好天気が続いているということを考える暇もなく、いやたとえ考えたとしても思わず足をとどめるであらう。これと同じように報道、通信、交通がその機能を果さなくなった時、社会の大衆は後になつては荒唐無稽として容易に片づけることの出来るような言葉もそのまま受け容れるのであつて、どんな暗示にも容易にひつかかつてしまふものである。

(清水幾太郎『流言蜚語』より。一部省略)

問一 傍線部(1)のように筆者が考えるのはなぜか、説明せよ。

問二 傍線部(2)はどういうことを言っているのか、説明せよ。

問三 傍線部(3)のような事態が起こるのはなぜか、本文に即して答えよ。

白
紙

次の文を読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

今は昔、中ごろの事にや、貧しく落ちぶれたる人、身のたづきなままに、似げなく、もの情けなげなる男の妻となりて、片田舎に住み待るが、この女、顔かたち美しく、何事につけても拙からず、琵琶、琴弾き、草紙、歌のみ心深く、世の事わざや後れたりけん、かの夷男、さらに心あはずとて、立ち去らんとす。されどこの女、人憎からず、うるはしきさまなりければ、言ひ出づべき言の葉なくて、いかなる疵をか求め出でんと、折節を待ちゐたるに、風うち吹き、門田の稲葉そよめきあひて、もの寂しき夕つ方、「この稲葉につけて、よからん歌詠み給へ。さらすは添ひたてまつらじ」と言へば、女いと恨めしく恥づかしと思ひて、顔うち赤めて、

穂に出でていねとや人の思ふらんつれなの我やあきを見るから

と詠みたりければ、男いとかなしく思ひて、いささか事とのはざるをも思ひ忍び、長き縁となり果てけるとかや。されば、男女の媒ともなりぬるは、ただこの大和歌なりとぞ。

(『雑々集』より)

注(*)

身のたづき 生活の手段。

草紙 和歌や物語を記した書物。

いね 稲と「去ね」との掛詞。

つれな 形容詞「つれなし」の語幹。ここでは、素知らぬふうである様をいう。

あき 秋と「飽き」との掛詞。

から ここでは逆接的な含意がある。

問一 傍線部(1)のように男が思った理由を説明せよ。

問二 傍線部(2)を、文意が明らかになるように、ことばを補って現代語訳せよ。

問三 和歌の第四句「つれなの我や」は、女のどのような気持ちを言ったものか、和歌全体を踏まえて説明せよ。

問題は、このページで終わりである。

